看護大学生の学士力獲得における現状と今後の課題

－4 年間の経年的変化から－

小沢久美子　久保宣子　蛭田由美

要旨

本研究は，看護大学生の学士力獲得における現状を 4 年間の経年的変化に着目して検討することにより，本学の学士課程教育における今後の課題を検証することを目的に看護学科学生 58 名に 4 年間縦断的に質問紙調査を行った。その結果，学士力を構成する 4 つの要素と学年間の比較では，『態度・志向性』は 4 つの要素の中で，入学時および全学年修了時のすべてにおいて最も得点が高かった。学士力の 15 項目と学年間の比較では，入学時および全学年修了時で得点が高かった項目は「倫理観」，低かった項目は順に「コミュニケーションスキル（外国語）」「数量的スキル」であった。今後は，「コミュニケーションスキル（外国語）」「数量的スキル」を高めるための教育的かかわりが必要と示唆された。

キーワード：看護大学生，学士力

Ⅰ．はじめに

2008 年に文部科学省中央教育審議会が『学士課程教育の構築に向けて（答申）』を提言し，卒業までに学生が最低限，身につけるべき能力として，「学士力」が明示された[1)]。『学校教育法第 52 条』によると，大学の目的は，「学術の中心として，広く知識を授けるとともに，深く専門の学芸を教授研究し，知的，道徳的および応用的能力を展開させる」ことである[2)]。文部科学省の『大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～』[3)] や，中央教育審議会の『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』[4)] では，将来の予測が困難な時代にあり，高等教育機関である大学には予測困難な次代を切り拓く人材の育成や学術研究の推進が期待されている。また批判的・合理的な思考力等の認知的能力，チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う倫理的・社会的能力，総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力，想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養・知識・経験等を高等教育段階で培うことが必要とされている。

これらのことから，看護系大学の学士課程における看護基礎教育は，看護の知識・技術の習得だけではなく，その基盤として，学士力の向上を目指した教育を行うことは，重要な教育課題のひとつであると考える。

本学看護学科では，2016 年度より 4 年教育課程の大学に移行したことから，学士課程を修了したものが身につけておくべき学士力の獲得状況を 1 年次から 4 年次の経年的変化に着目して検討することで，本学看護学科の学士課程教育で学生自身が学士力をどのように捉えているのか現状を知り，また，今後のカリキュラムや教育内容，教育の在り方を検証する手がかりとしたいと考えた。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，看護大学生の学士力獲得における現状を４年間の経年的変化に着目して検討することにより，本学の学士課程教育における今後の課題を検証することである。

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

質問紙調査による量的記述研究デザイン

２．研究対象者

2016 年度に入学し，A 大学看護学科に 1～4 年次まで在籍している学生を対象とした。

３．調査方法

入学時，１年修了時，２年修了時，３年修了時，４年修了時の５時点において自記式質問紙調査を実施した。対象者に研究の趣旨，倫理的配慮について文書および口頭で説明した後，質問紙を配布し記入後にその場で回収，施錠可能な場所で保管した。調査期間は 2016 年４月～2020 年２月であった。

４．調査内容

質問内容は，対象者の属性（年齢，性別），学士力 15 項目である。

学士力は，文部科学省中央教育審議会（2008）が提言した学士修了時に最低限身につけるべき共通の学習成果に関する参考指針としてあげられた学士力に必要な４つの要素『知識・理解』『汎用的技能』『態度・志向性』『統合的な学習と創造的思考力』[5] を参考に著者らが独自に作成した。指針の中で１つの文章の中に２つの意味内容が混在している場合は，１ つの意味内容になるように修正し作成した。質問項目は15 項目であり，「よくできる」から「できない」の４段階尺度で判定され，それぞれ４点から１点に評点化し，合計点を算出する。得点が高いほど学士力が高いことを示す。

５．分析方法

すべてのデータは数量化し基礎的集計を行った。学士力の 15 項目について，信頼性を確認した後，学年別の比較は Friedman 検定を行い，Friedman 検定で有意差が認められたものに対しては，多重比較（Steel-Dwass 法）を行った。統計処理は『IBM SPSS Statistics ver. 26.0 for Windows』を使用し，5%未満を有意水準とした。

６．倫理的配慮

研究対象者に調査の趣旨，匿名性，参加同意の自由，協力拒否の自由，成績評価には影響しないこと等を文書および口頭で説明し，回答の提出でもって同意したことと判断した。本研究は八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た（No.16-06）。

Ⅳ．結果

１．分析対象者の概要

A 大学看護学科に 1～4 年次まで継続して在籍し，研究への同意が得られた学生は 58 名（男性７名，女性 51 名）であった。

２．学士力の内的妥当性

学士力の 15 項目は，入学時，１年次修了時，２年次修了時，３年次修了時，４年次修了時において，Cronbach's α=.857～.888 で内的妥当性は高かった。

３．学士力の学年間の比較

１）学士力の４つの要素について（表１）

学士力を構成する４つの要素の平均値を学年別に比較したところ，『態度・志向性』は，４つの要素の中で，入学時および全学年修了時のすべてにおいて最も得点が高かった。『知識・理解』『汎用的技能』は，４ 年修了時が入学時および 1，2，3 年修了時より有意に得点が高かった（順に p=.000，p=.002）。『態度・志向性』は，４年

修了時が入学時および 2，3 年修了時より有意に得点が高かった（p=.000）。『統合的な学習と創造的思考力』は，4 年修了時が 2 年修了時より有意に得点が高かった（p=.025）。

2）総得点について（表１）

学士力の総得点を学年別に比較したところ，4 年修了時が入学時および 1，2，3 年修了時より有意に得点が高く，1 年修了時が入学時，2 年修了時より有意に得点が高かった（p=.000）。

3）学士力の各項目別について（表２）

学士力の 15 項目の平均値を学年別に比較したところ，入学時および全学年修了時ともに最も得点が高かった項目は「倫理観」，低かった項目は順に「コミュニケーション（外国語）」「数量的スキル」であった。

「多文化・異文化に関する知識の理解」「人類の文化，社会と自然に関する知識の理解」は，4 年修了時が入学時および 1，2，3 年修了時より有意に得点が高かった（p=.000）。「情報リテラシー」は，4 年修了時が入学時および 2，3 年修了時より有意に得点が高かった（p=.000）。「論理的思考力」は，4 年修了時が入学時，1 年修了時より有意に得点が高かった（p=.002）。「問題解決力」は，4 年修了時が入学時より有意に得点が高かった（p=.003）。「コミュニケーション（日本語）」「チームワーク」は，4 年修了時が 2 年修了時より有意に得点が高かった（順に p=.049，p=.048）。「倫理観」は，2 年修了時が入学時および 1 年修了時より有意に得点が低く，また 4 年修了時が 2，3 年修了時より有意に得点が高かった（p=.000）。「生涯学習力」は，4 年修了時が 2，3 年修了時より有意に得点が高かった（p=.038）。

表1　学士力の4つの要素および総得点と学年間の比較

median（25～75percentile）

要素	入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	P値
知識・理解	2.56（2.0～3.0）	2.79（2.5～3.0）	2.78（2.5～3.0）	2.73（2.5～3.0）	3.06（3.0～3.0）	.000
汎用的技能	2.72（2.3～3.0）	2.80（2.6～3.0）	2.75（2.5～3.0）	2.75（2.5～3.6）	2.93（2.8～3.2）	.002
態度・志向性	3.14（2.8～3.5）	3.16（3.0～3.5）	3.01（2.8～3.2）	3.11（2.8～3.4）	3.25（3.0～3.5）	.000
統合的な学習経験と創造的思考力	3.00（3.0～3.0）	3.06（3.0～3.0）	2.96（3.0～3.0）	3.01（3.0～3.0）	3.20（3.0～4.0）	.025
総得点	43.34（39.0～46.0）	44.48（42.0～48.0）	43.15（40.0～46.0）	43.70（41.7～46.5）	46.48（43.0～50.0）	.000

※ Friedman検定（多重比較：Steel-Dwass法）　n=58

※ *：P<.05，**：P<.01，***：P<.001

表2　学士力の各項目別と学年間の比較

median（25～75percentile）

	項目	入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	*P*値
知識・理解	多文化・異文化に関する知識の理解	2.57（2.0～3.0）	2.82（2.7～3.0）	2.79（2.0～3.0）	2.74（2.0～3.0）	3.08（3.0～3.0）	.000
	人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	2.57（2.0～3.0）	2.75（2.0～3.0）	2.77（2.0～3.0）	2.72（2.0～3.0）	3.03（3.0～3.0）	.000
汎用的技能	コミュニケーションスキル（日本語）	3.45（3.0～4.0）	3.48（3.0～4.0）	3.32（3.0～4.0）	3.41（3.0～4.0）	3.55（3.0～4.0）	.049
	コミュニケーションスキル（外国語）	2.24（2.0～3.0）	2.31（2.0～3.0）	2.24（2.0～3.0）	2.12（2.0～2.0）	2.20（2.0～2.2）	.366
	数量的スキル	2.50（2.0～3.0）	2.58（2.0～3.0）	2.55（2.0～3.0）	2.57（2.0～3.0）	2.69（2.0～3.0）	.213
	情報リテラシー	2.81（2.0～3.0）	2.94（3.0～3.0）	2.74（2.0～3.0）	2.81（3.0～3.0）	3.15（3.0～3.2）	.000
	論理的思考力	2.60（2.0～3.0）	2.67（2.0～3.0）	2.79（2.0～3.0）	2.79（2.7～3.0）	2.95（3.0～3.0）	.002
	問題解決力	2.76（2.0～3.0）	2.84（3.0～3.0）	2.86（3.0～3.0）	2.84（3.0～3.0）	3.05（3.0～3.0）	.003
態度・志向性	自己管理力	3.05（3.0～3.0）	3.00（3.0～3.2）	2.98（3.0～3.0）	3.03（3.0～3.0）	3.15（3.0～4.0）	.291
	チームワーク	3.19（3.0～4.0）	3.15（3.0～4.0）	3.00（3.0～3.0）	3.22（3.0～4.0）	3.24（3.0～4.0）	.048
	リーダーシップ	2.86（2.0～3.0）	3.00（3.0～3.2）	2.86（2.7～3.0）	2.96（3.0～3.0）	3.05（3.0～3.0）	.120
	倫理観	3.47（3.0～4.0）	3.48（3.0～4.0）	3.13（3.0～3.2）	3.34（3.0～4.0）	3.58（3.0～4.0）	.000
	市民としての社会的責任	3.14（3.0～4.0）	3.13（3.0～3.0）	3.03（3.0～3.0）	3.05（3.0～3.0）	3.24（3.0～4.0）	.154
	生涯学習力	3.14（3.0～4.0）	3.20（3.0～4.0）	3.08（3.0～4.0）	3.05（3.0～3.0）	3.27（3.0～4.0）	.038
	統合的な学習経験と創造的思考力	3.00（3.0～3.0）	3.06（3.0～3.0）	2.96（3.0～3.0）	3.01（3.0～3.0）	3.20（3.0～4.0）	.025

※　Friedman検定（多重比較：Steel-Dwass法）　　n=58

※　*：*P*<.05，　**：*P*<.01，　***：*P*<.001

Ⅴ．考察

『学士課程教育の構築に向けて（答申）』によると，各専攻分野を通じて培う学士力は，4 つの要素から構成されており，学士課程共通の学習成果に関する参考指針が示されている。

本研究の総得点と学年間の比較について，4 年修了時が入学時および1，2，3 年修了時より有意に得点が高く，1 年修了時が入学時，2 年修了時より有意に得点が高いという結果であった。これはカリキュラムの特徴からみると，1，2 年次は机上での学習が多く，1 年次は理想の看護師像と自己を適合させながら，主に一般教養に関する科目を多く履修している。しかし，2 年次は医学的知識や専門看護学に関連する授

業の割合が多くなり，また初めての受け持ち患者実習があり，看護という仕事に対してのやりがいと責任を感じる反面，看護の厳しさを実感し，イメージしてきた理想の看護と現実の違いを知るといった現状がある。このカリキュラムの特徴が2年修了時の得点が最も低くなった原因ではないかと考えられる。

また文部科学省[5]によると，臨地実習は看護の知識・技術の統合を図り，看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに，看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付けることを学修目標としている。3 年次秋学期から 4 年次春学期にかけては，各専門領域別実習が増え，保健医療従事者や患者・家族，教員やクラスメイト等との社会関係を経験したことで，4 年修了時には学士力が総合的に高まったものと示唆された。

以下に，学士力を構成する4つの要素と学年別の特徴を考察する。

1．『知識・理解』について

『知識・理解』は，専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに，その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解することであり，多文化・異文化に関する知識の理解，人類の文化・社会と自然に関する知識の理解がある。

本研究では，4 年修了時が入学時および 1，2，3年修了時より有意に得点が高く，1年修了時は入学時より得点が伸びているが，2，3年次は得点が横ばい，もしくは低下しているという結果であった。カリキュラムの特徴上，1 年次では多文化・異文化や，社会情勢や自然・文化等の一般教養を学び，学年が進むにつれて，専門的知識や技術が修得できるよう構成されていること，4 年次は臨地実習で患者・家族とかかわり，普段から新聞やニュース等から社会情勢を知り，その他の一般教養を高めて幅広い視野をもつことが対象とかかわる上で必須であることを学ぶ。これらのことが結果に影響したものと考えられる。

2．『汎用的技能』について

『汎用的技能』は，知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能とされ，コミュニケーションスキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力がある。

学士力の 15 項目の中で入学時および全学年修了時のすべてにおいて「コミュニケーションスキル（外国語）」が最も低かったことは，久保ら[6]の「世界の看護の現場の理解」「国際協力を行う上で看護職に必要とされる能力の習得」などへの関心が高く，外国語を学びたいとは思っているが，海外渡航の経験や外国語検定の資格の有無に関わらず，外国語の会話力では，「あまり話せない」「全く話せない」と認識している学生が8割を超えていたという結果からも想像がつく。

また「数量的スキル」の得点が2番目に低かったことは，本研究の対象者に行った入学時の一般常識調査において，「数学」の得点が低く，計算を苦手と感じている学生が多くいたことからもうなずける。さらに，2 年次に必修で履修する「保健統計学」「疫学」を学ぶ上で基礎となる数学的な知識や能力が獲得できない状況にあるため，看護場面や看護研究を行う上で求められる統計的手法や，統計結果から読み取れる論理的思考の解釈が難しい状況にあると示唆された。今後は，「コミュニケーションスキル（外国語）」「数量的スキル」を高めるための教育的かかわりが必要と示唆された。

3．『態度・志向性』について

『態度・志向性』は，自己管理力，チームワーク，リーダーシップ，倫理観，市民としての社会的責任，生涯学習力がある。

本研究では，『態度・志向性』は，学士力を構成する4つの要素の中で，入学時および全学年修了時のすべてにおいて最も得点が高く，これ

は，前述したように看護職が看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うことに重点を置きながら日々教育を受けている結果と考えられる。

さらに，学士力の15項目の中で「倫理観」が入学時および全学年修了時で最も得点が高かった。「倫理観」の内容は，自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる[1]である。また近年の社会的背景として，情報通信技術の進展，個人情報として取り扱うべき範囲の曖昧さ等の問題が取りあげられている。看護学生は入学後，早期から日本看護協会の「看護者の倫理綱領」[7]にふれ，社会的な責務を果たす，かつ平等な看護を受ける権利などの尊厳の保持，人々の知る権利や自己決定の権利等の権利擁護，守秘義務，生命倫理について学ぶ。また個人情報保護法[8]にふれ，特に医療分野は個人情報の性質や利用方法から，個人の権利・利益の保護と個人情報の有用性を十分認識し，適正な取り扱いを行う必要があることを学ぶ。このように，看護学生は様々な側面から「倫理観」について総合的に学ぶ教育内容となっており，その重要性を認識しながら行動している結果と示唆された。

４.『統合的な学習経験と創造的思考力』について

『統合的な学習経験と創造的思考力』はこれまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し，自らが立てた新たな課題にそれらを適用し，その課題を解決する能力[1]とされている。本研究では，『統合的な学習経験と創造的思考力』は4年修了時が2年修了時より有意に得点が高いという結果であった。4年次は大学教育の集大成として，「看護の統合と実践」分野を学修する。この分野では，チーム医療の一層の推進が重要であることから，多職種連携について学び，臨床判断を行うための基礎的能力を養い，専門基礎分野で学んだ内容をもとに看護実践を段階的に学ぶことが求められる[9]。また，看護師・保健師国家試験に向けた学習を強化している時期でもあり，これらのことが結果に影響したものと推察される。

５．本研究の限界と今後の課題

本研究では，大学4年間の学士力に関する学びの経時的な変化を確認するために調査を行ったが，入学前や入学後の教育課程や心理的要因，社会的背景が結果に影響を与えた可能性がある。また，一般的な他の専門課程の学生と比較していないことから，看護学生の特徴を明らかにするには限界がある。今後は，看護学生以外との違いや，学士力に影響を与える要因についても検討して看護学生の特徴を明らかにしていくことが課題である。

Ⅵ．結論

本研究は，看護大学生の学士力獲得に関する現状を4年間の経年的変化に着目して検討することにより，本学の学士課程教育における今後の課題を明らかにすることを目的に看護学科学生58名に4年間縦断的に質問紙調査を行い，以下の結論が得られた。

１．学士力を構成する４つの要素と学年間の比較では，『態度・志向性』は4つの要素の中で，入学時および全学年修了時のすべてにおいて最も得点が高かった。

２．学士力の 15 項目と学年間の比較では，入学時および全学年修了時で最も得点が高かった項目は「倫理観」，低かった項目は順に「コミュニケーションスキル(外国語)」「数量的スキル」であった。

３．今後は，「コミュニケーションスキル（外国語)」「数量的スキル」を高めるための教育的かかわりが必要と示唆された。

謝辞

本調査にご協力いただいた看護学生の皆様に深く感謝いたします。

研究助成情報

本研究は，平成 28 年度～平成 31 年度学校法人光星学院イノベーションプログラム（基金）研究等補助金の助成を受けたものである。

利益相反(COI)に関する開示事項はない。

引用文献

1）学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ），文部科学省，2008
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm（検索日 2020/3/2）
2）菅野和夫　他：ポケット六法，有斐閣，p.380，2007.
3）大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～，文部科学省，2012
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/.../1312798_01_3.pdf（検索日 2020/3/2）
4）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申），文部科学省，2012
5）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラムー「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標ー，文部科学省，2017.
6）久保宣子，山野内靖子　他：看護大学生の国際看護活動に関する意識および教育ニーズに関する調査, 八戸学院大学紀要, 57, 151-161, 2018.
7）看護者の倫理綱領：日本看護協会, 1-6, 2003.
8）内閣官房ＩＴ総合戦略室：個人情報保護法の改正概要，厚生労働省，2015.
https://www.mhlw.go.jp/file/05.../151117_tf1_s4.pdf（検索日 2020/3/2）
9）看護基礎教育検討会：厚生労働省，2019.
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html（検索日 2020/3/2）

執筆者紹介（所属）

小沢　久美子　八戸学院大学　看護学科　教授
久保　宣子　　八戸学院大学　看護学科　講師
蛭田　由美　　八戸学院大学　看護学科　名誉教授